

● シリーズ 私の見た日本 Vol.201

## 狭い空間に存在する座

季 思傑 (キ シケツ)

中国上海市生まれ。  
2016～2017年、メロス言語学校  
2018～2022年、日本大学  
芸術学部デザイン学科修了

## 日本に来たきっかけ

私が建築に対して関心を持った契機として、小さい頃に、大工であった祖父が家の家具などを作る姿に憧れを抱き、幼心ながらも「物を作りたい」という心が芽生えたことにあります。その後、高校生の時に日本に行く機会があり、その時に日本の椅子や家具のデザイン性の高さに衝撃を受けました。日本の室内空間は居心地の良い独自のデザインであり、古典的な形が一般的である中国とは全く異なるものでした。その中で一番衝撃を受けたのは柳宗理の「パタフライツール」という椅子です。そんな私は日本でデザインを学びたいと思い留学をし、その後「日本大学芸術学部デザイン学科」に進学しました。今回は私が日本で体験した「座のある狭い空間」について述べさせていただきます。

## 中国と日本の空間の比較

私が日本に来てまず驚いたのは、狭い空間の使い方です。日本は狭い空間がたくさんあります。しかし、どの空間も狭いと感じないのです。それぞれの狭い空間にはそれぞれの空気感がありどれも居心地が良いのです。まず一番に驚いたのは一人暮らしを始めたマンションです。日本の一人暮らしの部屋は、平均の大きさは6畳です。それに比べて中国でのマンションの平均的な大きさは、100平方メートルで3LDKです。中国では、50平方メートルの部屋でも牢獄や圧迫感のある部屋だと思われてしまいます。狭い空間には閉鎖的や牢獄などのマイナスなイメージしかなくポジティブなイメージはありませんでした。しかし、日本の部屋は実際に住んでみるとキッチン、リビング、浴室、寝室が完

備されていて機能性が高くとても住みやすいものでした。収納スペースも工夫されていて窮屈な感じが全くしません。換気も十分にでき、狭くても外部の緑をうまく取り入れていて、中国の部屋より開放感さえ感じます。

日本には「起きて半・寝て一畳」という言葉があります。意味は、人間一人に必要なスペースは、座っている時に半畳、寝ている時に一畳だけ。いくら天下を取ったって、一食に二合半以上のお米は食べきれないという意味です。つまり、必要以上のものを欲しがったり手に入れたりしても使い切れないのだから仕方がないということです。私は、日本に住む前はそんな考えなど一切ありませんでした。日本で生活する上で身についた考えです。生活の中で、必要な部分と不要なスペースに気づき、スペースの分け方が身に付いて来ました。自分の部屋や空間に対して、もったいないと感じるスペースに気づき「本当に必要なスペースとは何か」を常に考えるようになりました。もったいないという言葉は日本にしかない言葉ですが、物だけではなく空間にも重要な言葉だと考えます。

では、日本は何故、狭い空間が良い空間となるのでしょうか？それは、日本人特有の空間意識は、日本特有の畳によって形づくられています。一畳という空間の単位は、日本特有なもので「人間一人が占める最小単位の生活空間」を具象的に表したのが畳一枚の大きさです。畳で空間作りをしてきた日本では、狭い空間を気持ちの良い空間にすることができます。そこで、狭い空間を心地いい空間にするなかで、とても重要なことは座であると考えます。日本の狭い空間には、座の文化が存在しているように感じます。

## 四畳半の茶室

ここでまず私が驚いたのは、四畳半という空間です。茶道は中国からの発祥とされていますが、中国の茶室と日本の茶室は大きく違います。日本の四畳半の茶室に比べて、

中国は茶館といった個室や大部屋が何個もある建物自体が茶館でとても大きいスペースです。しかし、日本の茶室は、座があるからこそ、狭いことが気にならず、むしろ狭いからこそその居心地の良さや風情があります。

座とは人と人との関係を肌が触れ合う距離まで縮める寄合文化を茶道の用語では「一座建立」と言って主客を中心として座を作ることの意味です。この時の座は主客が対座している物理的な場所や動作でありながら、同時にその内面の意識のなかで繰り広げられる主客一体の共感帯を意味するものです。他者と共有する空間を規則と作法によって作り挙げられる事を「座」と言います。人間関係の一座を生み出す方法でありその精神と定義します。私はこの「座」を自分と他者の緊張感のある居心地の良い「見えない空間の隙間」のような物だと考えます。日本建築の日常のなかには、こうした要素がたくさん存在すると感じています。

## 日本特有の空間に存在する座

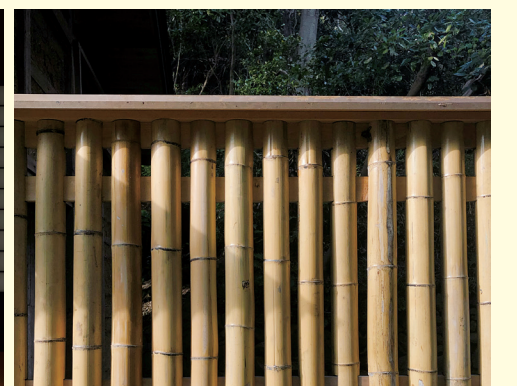
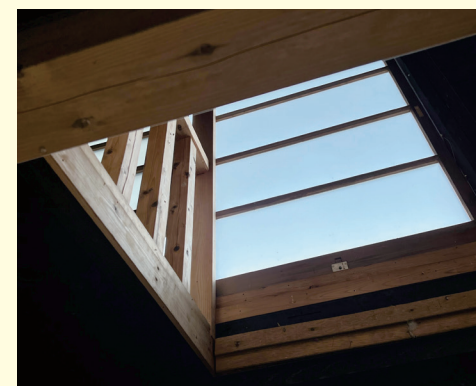
日本の住宅を世界と比べると小さく「ウサギ小屋」といわれることもありました。いかに狭い空間に押し込まれているようなイメージがありますが、実際には中国、アメリカ、ドイツと比較すると、すべての住宅を平均した面積は実は「わずかの差」でした。しかし確かに面積が一番小さいのですが、家族が住む住宅でも他者と自分の距離感を大切に「座の空間」を持ち、個々の座の空間を生かした間取りや空間作りがされているので、日本の住宅は小さくても「心地良い空間」となっていると私は考えます。

住宅以外にも、日本には、日常的な様々な場所で「座」を感じます。その一つが電車です。日本の電車にはじめて乗った時は、驚くことばかりでした。まず、満員電車以外でも空席がたくさんある状態でも日本人は座席に大きく座ることはなく、小さく縮こまるような形で座っていて、しかも窮屈そうには一切見えず気持ちよさそうに見えるのです。車内

アナウンスでは車掌さんが、「おはようございます」や「お疲れ様でした」などの挨拶する時もあり、大雨の日には、「傘を忘れずお持ち帰りください」などの丁寧なアナウンスが流れるのは世界中でも日本だけです。そして一番混雑する時は、「駆け込み乗車はおやめください」とアナウンスが流れ、人を電車まで誘導する車掌さんがたくさん居て人々を電車に乗るまで誘導してくれます。電車という空間の中で車掌と乗客の間に互いに思いあい自然と成り立つ座の空間が存在するからこそ気持ちよく利用できるのだと思います。日本人は、自分と他者との緊張感があり心地良い空間を大切にしているからこそ、どんな空間でも狭い空間を心地良くすることができるのだと考えます。



上／柳宗理の「パタフライツール」 下／漁師の道具小屋



左上／吹き抜け側の開口部 中央上／和室からの風景 右上／竹で作られた塀 左下／建築の隙間 右下／廊下の光と影のコントラスト